
学園のアイドルと少年

琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園のアイドルと少年

【Zコード】

Z8987W

【作者名】

琥珀

【あらすじ】

平凡をこよなく愛し続けてきた少年、工藤悠は、ある日、突然学園のアイドル　一之瀬綾香から告白された。勉学ができるわけでもなく、スポーツが優れわけでもなく、イケメンというわけでもない（本人談）悠にとつては予想の欠片もしていなかつた。さて、これから悠の生活に何が変わるのであらうか。

人物紹介

登場人物一覧

工藤悠

今作品の主人公。本人曰く、イケメンでもなく、スポーツに優れるわけでもなく、とりわけ勉強ができるわけでもないと言っている。好きな言葉が平凡と言つており、目立つことが嫌い。ある日突然、学園のアイドルと言われる一之瀬綾香に告白されて付き合つうことになる。

一之瀬綾香

今作品のヒロイン。あまりにも整つた容姿と性格の良さなどから、もはや学園のアイドル化。彼女が起こすことはなんでも校内中の噂になる。ある日突然、悠に告白。悠だから好きになつたと称しているが、理由は今のところ不明。

工藤理沙

悠の妹。非常におせっかいやきで、家では悠の身の周りの世話をほとんどやつていて。朝食や食生活には厳しく、朝からでも毎日凝つた料理を作る。

広瀬幸也

悠とは幼なじみ。悠と結衣とは幼いころから一緒におり、面白いことが大好き。悠も幼いころから被害にあつているらしい。

立花結衣

悠とは幼なじみ。悠と幸也とは幼いころから一緒にいて、現在では、綾香とも結構仲が良いらしい。

プロローグ 突然の告白

突然だが、この学校にはアイドルといつものがいる。

アイドルとかどこの都市伝説だよとか、もうその言葉 자체死語かもしれないが、この学校には本当に芸能人顔負けの姿をして、性格も良し、勉強もできるといった、それはそれで漫画や小説の世界の人みたいな人がいる。

その人が何かしたら、たちまち噂になり、人々の注目を集めている。

まあ、俺には関係ない話だ。

そう、本当に関係のない話。俺は、ごく普通の毎日を淡々と、そして着々と過ごしていきたいだけだし、そんなアイドルとか言われている人を追いかけたり、ましてや付き合いたいとかも思っていない。

そんな人がもし俺と何か付き合ってみる。自分で言つては悲しくなるだけだが、どうしてお前と何か付き合っているんだとか言われるのがオチだ。

俺はそういうのはごめんだし、自分の力量もわかっている。そういう人は、イケメンとでも付き合うのが通りであろう。美少女にはイケメンを、普通の人にはフツメンを、不細工の人にはブサメンを。まあ、例外もある。それは、何かに優れている人であったり、何かに堅実だったり、そういう人達が女性の人を魅惑していく。

……まあ、良いんじゃないか？ そういうのがあっても。

さて、どうして俺がこんな話をしているかと言つと理由があるんだ。

それは海よりも深い話である訳でもない、それこそ漫画や小説にありがちな話だったりもするんだ。

「お願いします！　私と付き合ってください。」

告白された。

急展開で俺の思考回路がよく働いていないが、これだけ率直に伝えられたら誤解も何もないと思つ。

某月某日俺は、学園のアイドルとまで言わわれている少女に告白されたのだった。

好きな言葉は平凡。嫌いな言葉は非日常。

平凡をこよなく愛し続け、今日のこの口までなにも田立つたことも、噂になるようなことも、ましてや事件や事故に巻き込まれたりしてない。

なのに、なんで！

嗚呼、お父さん、お母さん、今日も俺は元気にしています。

天を仰ぎながら、とりあえず現実逃避。……結論、無駄。

こんなことしていてなにも解決法には繋がらない。そんなことはわかっている、……わかってはいるんだけど、せつせざる負えないのがこの現状だ。

だつてそうだろ？　こんな好きな言葉は平凡とかぬかしている奴だぜ。そんな奴に学園のアイドル様が俺に告白なんぞ予想できるはずないだろ。こうじつちやなんだが、これを予想するよりも宝くじで1等を予想するほうが簡単だと俺は思つ。

「あのつー！　やつぱり、……だめ、かな？」

いつまでも返事をしない俺を見かねてか、学園のアイドル様が俺にそう聞いてきた。

やつぱり恥ずかしいのが顔をうつむいたまま、しかし眼はしっかりと俺のほうを見ていて、手は緊張からか震えてそれを抑えるかのように組んでいて、まるでお願いするような感じになつていた。心なしかちょっと涙ぐんでいるようにも見える。

……卑怯！

不覚にもドキッとした。

そりやあそだうだらう。なにせこんな美少女から上田遣いなんかされたらドキッとくるだらう。むしろしなにやつなんか不能だ。

そりやあまあ、美少女と付き合いたいと思わなかつたわけでもない。俺だって男だ、そういうことを思ったこともあつたさ。

でも、それはそれ。まず考へてもみろ、おかしいだろ？ 取り柄もない男に学園のアイドル様が告白してくるんだ？

何か裏があると考へてもおかしくない。いや、むしろ何があると考へてい。それに仮に何もないとしても、俺と学園のアイドルが付き合つたら学校中その話題に染まるし、ついでにやつかむ輩も増えるだらう。俺はそんなのはごめんだ。

まあ、どうせ裏になにかあるに違いない。とりあえず理由を聴くことにして。

「どうして？」

「……ん？」

「どうして俺なの？」

自分で答えづらい質問だとは思ひ。だが、そのことを聴かずにはいられない。何かあるにしても、なににしても、素直に聴いてみたい疑問を問い合わせる。

「貴方が好きだからです」

「まあ、告白だし？」

「俺のどこが？」

「好きになるのに理由つて必要なの？」

そりやあそだ。

まあ確かに、相手の「」が好きで、それから「」といひも好きで、あとこういふところが好きだから貴方と付き合いたいです。といえる奴なんて殆どいないだろ。

……ていうか、そんな告白は嫌だ。

「それに、まあ強いて言つなら、一田惚れかな」と、微笑みながら

彼女は言つ。

……だめだ、敵わない。

他にも、聞きたいことはあるし、対抗策もあるけど、……でも、こんなに真っ直ぐな眼をした少女には敵ないと俺は思った。

……ああ、悔しいな。

俺も学園のアイドルに 一之瀬綾香に、惚れてしまつたのだ。

第一話 田常

「それで、……返事聽かせてくれる、かな？」

つい見惚れてた俺に、一之瀬さんがそう問いかけてくる。

「いいよ」

思わず口に出た言葉に、一之瀬さんが一瞬固まつて「え?」と、聞き返してきた。

……あれ、なんかまずい」と言つたような。そう思つた時にまもう遅かったようだ。

「本当に、……いいの?」

「うん、俺なんかでよければ」

おい、なにを口走つている、俺。

信じられないというばかりに、一之瀬さんが、感激のあまりか手で口を被い、涙を流している。

あー、これは腹を括るしかないみたいだな。

ただでさえかわいい容姿に、あんな真剣な真っ直ぐな眼をしていたら、いくら俺でも本気つていうのが眼に取れる。それに、あんな笑顔を見せられたらたまたもんじゃない。

それに、どうやら俺は、思いのほかに一之瀬さんのことが好きになつてゐるみたいだ。

ああ、さよなら、平凡で平和な日々。

涙を流して喜んでいる一之瀬さんを見ながら、明日から大変そうだなど、不謹慎ながら頭でいっぱいになつていた。

しばらく時間が経ち、一之瀬さんもそろそろ落ち着いてきたみたい。結構の間、泣いていたためか、眼が軽く充血しているようだ。

「大丈夫?」

「あはは、ごめんね。見苦しい所みせて」

そう涙を拭いながら、微笑む一之瀬さん。

「いや、そんなことないよ。それより、本当に俺なんかでいいの？」

「なんで？ 私から告白したのに」

本当に不思議そうに、キヨトンとした表情でじらりを見る。

しかし、じうしてあらためてみると、学園のアイドルと騒がれるのもわかるような気がする。髪もさらさらだし、顔も小さくて眼がぱっちりと小動物みたいな眼をしているし、身体も出るところはでている。それに性格も良い。

確かに、このような美少女が身近にいたら、眼で追いかけたくなるし、少しでも仲良くなりたいと思うかもしれない。まあ、あくまで一般論だが。

「だって、一之瀬さんかわいいし、俺よりも良い人なんか沢山いるでしょ」

「私は、工藤くんだから好きになつたんだよ」「俺だから？」

うん、と頷く一之瀬さんに、更に首をかしげる。

俺、なんかしたつけ？　いや、学校内では田立つようなことは一切していないはずだし。それとも、街中で一之瀬さんに何かしたとかかな。いや、それでも、このような人を忘れるはずがない。

んー、と考えている俺が可笑しいのか、クスクスと一之瀬さんが笑う。

「まあ、工藤くんは気づいてなくて当然か、　あ！　忘れてた、今日用事あつたんだ。ごめんね悠くん、また明日の朝ね」「バイバイと手を振りながら、走っていく一之瀬さんを見ながら、手を振り返すことしかできなかつた。

「　さん、起きてくれさい。兄さんー」

重たい臉をあけ、誰かと思いつつ確認してみると、鈴とした声で、俺を揺すり起こしてくるのは、俺の妹の理沙だつた。まあ、そりや

あ理沙以外、俺を朝起こしに来る人なんかないから当たり前か。

「おはよう、理沙」

「はい。おはようございます、兄さん」

少し欠伸をして、瞼を擦りながら今の時刻を見る。

時計の短い針が六の数字を示している。うん、いつもながらの時間だ。

「ほら、兄さん。顔でも洗つてください。私は朝食の支度をしてますから」

そういうながら、部屋を去つていぐ理沙に続き、俺も顔を洗うために洗面所へと向かう。鏡の向こうにはいつも見慣れた顔があり、そこには冴えない顔がこっちを見つめている、……冴えない顔してるな俺。

顔を洗い見出しなみを整えて、リビングへと向かうとそこにはHプロン姿の理沙がいた。

相変わらず俺の妹でありながら、整った容姿とスレンダーな肢体。でも、出るとこにはちゃんと出てるところ、俺と一つしか変わらないといつのに、何か気品があるような気がする。

「あ、兄さん。少し待つてくださいね、今運びますから」

そういう、出来上がった品をテーブルへと運んで行く理沙、本当に出来た妹である。

何もなかつた食卓に、つい先ほど出来たと思われる品がどんどん埋まつていぐ。

味噌汁にご飯に焼き鮭にほうれん草のお浸しに卵焼き等々。朝食だからといって、ここまでしゃんとした食事は珍しいのではないだろうか？

過去にそういう疑問に思つた俺は妹に聞いてみたことがある。妹曰く「朝食は、一日の全ての始まりです。疎かになんかできますか！」と、力説しながら十分近く話しを聽かされた。過去今までに、朝食を食べないことなど一度もなかつたが、もしそんなことがあつたら、

……考えただけでも寒気がする。

「はい兄さん、お待たせしました。では、食べましようか」

そう言いながら、席に着く理沙に続いて、俺も席に着く。食卓に並ぶおかずの品々、これを理沙が早起きして、いつも毎日作っているというのだから、あらためて考えるとすこし羨む。

「いつもありがとな」

「ん、急いでいたのですか、兄さん?」

いらっしゃ、頭でも打ったのかな? みたいな顔をしない。

「いや、ただ言いたかっただけだ」

「まあ、父さんと母さんに任されてしましね。これくらいにはしない

と」

「……ああ、そうだな。まあ、冷めないうちに食べよつか」

「そうですね、では

『いただきまーす』

そういうて、朝食を食べる俺と理沙。いつも通りの、何も変わらない日常。

「お、この鮭美味しいな」

「わかります? 昨日、新鮮な鮭が手に入つて焼き魚にしてみた」と思つたんです

「ああ、この鮭だけで二飯一杯は余裕だ」

「もう、兄さんったら」

クスクス笑う理沙に、俺も釣られて笑う。

いつして、今日も工藤家の何も変わらない日常が始まる。

第一話 変化

「さて兄さん、そろそろ学校に行きましょうか

「あれ、もうそんな時間か」

食事を済ませてゆっくりしていた俺に、理沙がそついつてくれるころには、時刻はちょうど八時に差し掛かるところだった。

俺と理沙は、同じ学校に通っているので、いつも八になると理沙が教えてくれる。目的地も同じなので、一緒に登校しているのだが、そのせいでいつも幼なじみの結衣と幸也にからかわれたりしたりする。

あいつら曰く『いくら兄妹だからって、高校生にもなって一緒に登校などしない!』だそうだが、この生活をずっと続けてきた俺たちにとっては、あまりピンとこない。

「じゃあ、行こうか

さう俺が言うと、「はー、兄さん」とつれしへりという妹の顔を見ると、思わずじりりまで和んでしまつ。

こんなことでうれしそうにする理沙をみると、こっちまでうれしくなるから不思議なものだ。ああ、こんなことだから、あいつらにシステムとか言われるんだろうな。

でもいいさ。だって、こんな些細なことだけで、理沙がよろこんでくれるのだから。

玄関を開けた先には、見慣れた景色と、道が連なっている。幸い、この家から学校までは近いから、毎日遅い時間でも遅刻せずに登校できる。

「おはよー、悠くん

さて、今日も元気に登校しますか。

理沙が、忘れ物をしたらしいので、少しだけ待つことになつたけど、まあ、遅刻するほどの時間でもないし、あまり急ぐ心配もないだろう。

「悠くん？」

それにしても、理沙遅いな。一体どうしたのだろうか。

「……むむむ、こいつなつたら」

ふと急に、俺の首まわりにやわらかい感触が……。

これは腕？

「おはよー、悠くん」

そういうて、首に手をかけて抱きついてきたのは、学園のアイドルこと、一之瀬さんだった。

「……なにしてるの」

「悠くんが、話しかけても無視するんじゃない」

そういうながら、頬を膨らませて口を尖らす一之瀬さん。うん、気づいてたさ。

一之瀬さんがさつきから話しかけてきたのも、玄関から出たら待ち伏せているのも気がついてたさ。でも、理解したくなかった。だって、この先の受難が待ち受けていることが分かつているのだから。

「なんで、俺の家の前にいるの？」

まあ、なんとなく分かるけど。

すると、笑顔で、

「だつて、昨日にこつたでしょ？『また、明日の朝ね』って」

ほら、やっぱ。

あの時は、色々と頭が混乱してて、あまり気にしていなかつたが、いづれこつなることは分かつていた。

だが、問題なこち。そのことも含めて付き合つて決めたんだから。でも。

「お待たせしました、兄さん。あれ、そこに誰かいるんですか？」

「おはよー。確か、理沙ちゃんだつけ?」

「…………」

「あ、理沙が固まつた。

「少し、失礼します。兄さん、ちょっとうちへ来て下せー」
その言葉に、素直に従う。

だつて、あの眼はやばい。俺の本能が、危険と知らせてくる。

「一体、これは、どうことですか? 兄さん」

どびつきりの笑顔で、俺に問いかけてくる理沙。

なんていうか気迫が凄い。今の理沙なら、プロレスラーですら裸足で逃げるレベルだらつ。……けしてそんなことを本人にはいえな
いが。

「……いや、……特に大したことは」

「へえ

そう言いながら、眼を細める。

あ、やばい。

「学園のアイドルとまでいわれている綾香先輩が、兄さんが登校するまで、玄関先で待ち伏せしていて、それに加え兄さんの首もとに抱きついていたのに、それが“大したことない”って言えるんですね」

「そりなんですかー、と白々しく。どうやら今の俺の回答で、

機嫌を完全に損ねさせたみたいだ。

さつきまで『はい、兄さん』と、ようんでいたのが嘘みたいに不機嫌になつてゐる。

どうすれば機嫌をなおすかなと考えてゐると、

「もしかして、兄さん。綾香先輩と付き合つことになつたんじゃありませんよね?」

「アハハ、そんなことないだらつ」

突然の問いかけに、つい棒読みで答えてしまう俺。

「笑いが乾いてますよ、兄さん。まあ、そんなことだらうかと思いましたけど。昨晩、兄さんの様子がおかしかったですし」

やれやれと肩をすくめるてこちらを見る理沙に対して、眼をそらす。相変わらず感のいい妹だ。すると、小さな声で理沙が何か呟いた。

「…………兄さんのばか」

「ん、なんか言つたか？」

「いえ、なんでもありません。あ、そういうちょっと用事を

思い出しました」

では、綾香先輩、兄さん、お先に失礼します。と言い残し立ち去る理沙。一之瀬さんもちょっと戸惑つたようで、一人でその姿を見送ることしかできなかつた。

「じゃあ、俺たちも行こつか」

「…………うん、そうだね」

そう言いながら、俺たちもゆっくり歩き始める。

「ねえ、悠くん」

「ん?」

「迷惑だつた?」

その問いかけにそんなはずないと笑いながら答える。

迷惑なはずがない。だって、俺を待つてくれたんだろう?

俺の家の玄関先に、いつでてくるかわからない俺たちを、一人で待つていた一之瀬さん。

まだ、俺だから好きになつた。っていう理由も聴いていなければ、こんな姿を見るといつも和んでしまう。

その言葉に安心したのか胸をなでおろすと、何故か急に走り出す一之瀬さん。その走り姿はあまりにも優雅で華麗に見えた。少し見惚れていると、立ち止りこちらに振りかえる。

「ほら、悠くん。早くしないと遅刻しちゃうよ」

そう言いながら、俺を急かす一之瀬さん。胸ポケットから携帯取り出して時刻を見てみると、既に一十分を越していた。

「ほら、早く早く

「ちょっと待ってくれ

そう言いながら、俺も走り出す。じつせん、やつくり登校してい
る暇はないようだ。

「『兄さんのはか

か

ただそんな中、理沙のその言葉が、何故かいつまでも心に引っ掛
かっていた。

第三話 親友

「はあ……」

「どうした悠、辛氣臭い顔して。なんかあつたのか？」

さつきの理沙の言葉が、何故かいつまでも心に引っ掛かっていた俺は、どうやら思つてゐるよりも、表情に出でてゐるようだ。

「ああなんだ、幸也か」

「『なんだ』って……」

そういうて頃垂れる幸也。無意識でいつた言葉だが、予想以上に幸也にダメージを与えたらしい。……とりあえず、こいつをどうにかしとくか。

「あはは、うそそそ冗談だつて。お前のことは大事な親友だと思つてゐるよ。…………多分」

「おい、聴こえてるぞ」

ジド眼で返してくる言葉に、とりあえず笑つてごまかす。こいつとは、もう付き合ひも長いので気兼ねなくこいついた悪ふざけもできる。俺の態度に呆れたのか、幸也はもういいや、と半ば諦めた様子でため息を吐いた。

「そういえばさ、悠。通りすがりに聴いたんだけどさ」

「ん、どうした？」

「お前、一之瀬綾香と一緒に登校してきたって本当か？」

「ぶはっ」

その問いかけに、思いつきりせき込む。

いづれこうなることは予想していたが、正直、遅い時間に登校して、周りに生徒がいなかつたので、今日は大丈夫かと安心しきつていた。

大方、誰か窓から俺たちが走つてくる姿を見たのだろう。流石は、アイドルといわれるだけあって、その話題性は大きいらしい。

そんな俺の様子を見て、幸也はやれやれと呆れながら会話を続け

る。

「その様子からすると本当みたいだな。……もしかして付き合って
るのか？」

その言葉に再びせき込む。

幸也はといふと、「……おいおいまじかよ」と言しながら顔が引
きつっている。まあ、その気持ちは分かる。俺だって幸也が一之瀬
さんと付き合っているとか言われたら、同じ反応をするだろう。

「だれにもいうなよ」

「あはは、あんまり俺を甘く見るなよ」

「だよな。俺はお前みたいなやつを親友に持つて幸せだよ」

そう言いながら、俺は幸也の背中をバンバンと叩いて、友情を深
めあつた。

「ねえ、一之瀬さんに彼氏ができたんだって！」

「え、あの綾香様に彼氏が！？ 一体どんな人なのかな」

「なんか工藤悠つて人らしいわよ。だれか知ってる？」

「えー、知らなーい」

「俺のマイエンジンに彼氏だと……！」

「誰だよそいつは、この俺が見定めてやる！」

「あはは、みんなバカだなー。僕の綾香さんに彼氏なんてできるは
ずないじゃないかー」

……。

「なあ、幸也」

「どうした、悠？」

自分には関係ないみたいな顔をしてこちらを見る幸也。

「まさかとは思うが、お前が情報流したんじゃないよな？」

「はあ？ あんまり俺を甘く見るな」

その言葉に、キレだす幸也。

「うだよな、こくら幸也だからって疑い過ぎていた。

「すまん幸也、疑つて悪かつた。そうだよな、いつも俺を困らしてそれを楽しむ幸也だとしても、流石にこんなこと

「こんな面白い情報、俺が流さないはずないだり」

「痛ツ…」

「とりあえず殴つた。

「こいつだけは許さない。

「うわ、ちょ、やめろっ！」

「倒れている幸也に、さらに殴ろうと立ちあがる。

くそ、こいつを信用した俺がバカだつた。普段しつかりしている幸也だが、面白いことに食いつくやつだつた。どうやら俺は、こんなことが分からなくなるくらい気が動転していたらしく。

「あのー、悠さん。なんで辞書なんて持つ出してるんでしょうか？」

「あはは、考えればすぐにわかるだろ？？」

そう言いながら上に振りかざす。流石にびびったのか右手をこちらに向けて、後ずさりしているようだ。まあ、だからと言つたつてやめないが。

「おい悠、それは流石に洒落にならないって…」

「…知つたことか。

「せーの！」

幸也に田掛けて振り落そうとした瞬間、クラスの扉が勢いよくバンッと開かれた。

誰かと思いながら見てみると、もう一人の幼なじみの結衣だった。「悠これはどういうこと」と一 綾香と付き合つていて本当なのつてあんたら何やつてるの？」

「いや、ちょっとした戯れだよ。ほら、俺たちつて仲良いからね」

「おい！ 今、俺をその辞書で殴るつとしてただろー？」

「それで、結衣。どうかしたの？」

「いや、クラスの女子から聴いたんだけどさ。悠が綾香と付き合つているというのでどこもかしこもその話題で持ちきりよ」

「ガン無視ですかー！」と叫んでいた幸也は放つておく。結衣も全

然氣にしていないようだ。

それよりも、もうそこまで広まっているか。

そういうえば、周りの生徒もなんだか俺を見ながらヒソヒソと話しているような気がする。真相を確かめたいが、聞きだす勇気がないといったところか。

「綾香とは結構仲がいいからさ、聴いてみよつかと思つたら顔を真っ赤にして聽ける状況じゃないし、このままじゃ埒が明かないと思つて、悠本人に聴こうかと思つたんだけど」

そういうながらジグジグ眼でこぢらを見る結衣。それにしても、結衣と一之瀬さんが仲良いなんて初耳だ。

しかしこんなに早く広まるなんて予想外だ。幸也が言いふらしたりしたとはいへ、いくらなんでも早すぎだらう。

「それで悠、どうなの？」

「本当だよ、一之瀬さんは昨日から付き合い始めた」

その言葉に、結衣は眼を大きく見開いて、でも何故か頷いていた。理沙も結衣も驚くならわかるが、納得している意味がわからない。「しかしあんたが綾香とねー、ふーん

「な、なんだよ」

「別に、目立つことが大嫌いな悠が、綾香と付き合つっこつなるなんてわかっているのに、よく付き合つたねーって思つただけ」「俺もそう思つた！」

まあ、確かにそうなんだよな。

結衣も幸也も、俺の目立つのが嫌いというのは、わかっている。だから幸也もあんな風になつていたんだらうし、結衣もこいつやって確かめに来たのだろう。

正直、俺だつて理由はわからない。

でも、何故があの笑顔に惹かれるんだよなー。

「まあ、話しが聴けたことだし私は教室に戻るわ。悠、がんばれ」

「ん、がんばれって何のことだ?」

「あれのことだろ」

結衣の声援に疑問に思つたが、それはすぐに幸也が解決させてくれた。幸也の指の先には興味心身に聴いていた生徒達。俺たちの声が大きくて、聞こえたのだろう。

……まあ、いいけどさ。

これから忙しいらしい。と思いながら、そつとため息を吐いた。

第四話 姉妹

「はあー、疲れたー」

「お疲れ様」

そういうて机にひれ伏す俺に、幸也がニヤニヤとしながら近寄ってきた。

「元はと言つたらお前のせいじゃないか！」

「まあまあ、そんな怒るなって。今度ジユースおこるからさ」「ジユースつて……。お前子供じゃねえんだから」

先程、幸也のせいで俺と一之瀬さんが付き合つていいという情報が流れたせいで、クラスのみんなから質問攻めにあつた。やっぱり個人差があるといったものの、皆一様に気になるみたいだ。

元々、クラスに浮かなければいいなと思つていた程度なので、とりわけ仲が悪いというわけでもないが、良いつてわけでもない。ちなみに質問の内容はといったら、「どうして付き合うことになつたの？」とか「どっちから告白したの、やつぱり工藤くんから?」とかの程度で助かつた。

まあ、一部の男子生徒は憎らしい表情で俺を睨んでいたが。

「大体、お前は昔からそういうことが好きだつたよな。俺が何度も被害にあつたことか」

「そんなの今に始まつたことじやねえだろ？ 気にするなって」

そういうながら肩を叩いてくる幸也に、お前のせいだろと思ひながらため息を吐く。まったく、こつちは理沙と一之瀬さんのことで頭がいっぱいというのに、こいつやってみんなからの熱い視線を向けられたら考える暇もない。……ああ、今まであんなに平和だつたのこのに。

今までの生活の幸せさを惜しみながら、今の現状を見てため息を吐く。

「これも全部お前のせいだ

「まあそういうなよ、どうせ俺が言わなくてもすぐ広まつていたつて。何せ学園のアイドルに彼氏ができたってことだからなおさらだ。早いか遅いかの違い」

そう毅然として言われても、ムカつくものはムカつく。
「そんなことは言われなくてもわかっている。でも、納得がいかない」

「ほり悠、いつまでも拗ねてないで飯にしようぜ」

「……まあ、それもそうだな」

不貞腐れる俺に、幸也は笑顔でそう言つてきた。

そういうてコンビニのパンを取り出す幸也に続き、俺もいつもの通りに弁当を取り出そうとしたのだが、

「……そりいえば今日、理沙から弁当貰つてないわ」

「おこおい、嘘だろ。あの理沙ちゃんがお前に弁当を渡さないはずないだろ」

「嘘じやねえつて」

その一言があまりにも現実味がないのか、どうやら幸也は信じていらないみたいだ。

まあ、確かに幸也の気持ちは理解できる。あいつだつて理沙の性格をわかっているからか、食生活に厳しい理沙が、俺にコンビニの弁当とか栄養に悪いものは食わせないよう毎日弁当を作っていることは田ごろ一緒に幸也と昼食を食べているからあいつだつてわかつてしているのだろう。

だが、いつまでも弁当を出さない俺に、流石に冗談だとは思わなくなってきたようだ。

「……ひょっとして、マジなのか?」

「お前の言いたいことはわかる、俺だつて今氣づいたんだからな。でも本當にないものはないんだ」

肩をすくめながら、その事実を幸也に伝える。

幸也はといふと、「嘘だら……あのブラコンな理沙ちゃんが……などと呟いてくる。俺が一之瀬さんと付き合つてると知った時より

も驚きが大きかった。

「……そつこいえば、この学校に購買があつたよな。

まあ、理沙の作ったものには劣るが背に腹は代えられない。そう思つやいなや購買所にいこうと思つたのだが、場所がわからない。「幸也、購買所つてどこあつたつけ？」

「ああ、それなら確かにこの階段を下りてすぐだつたようなつてまさかお前、購買のパンを食おうと考へて居るのか？」

もうこの世も終わり、みたいな顔をして言つ幸也。

「ああ、食べるのもないしな。この際、しょうがないだろ」

「まあ、それもそつだけれど。でも、理沙ちゃんが何言つたつて俺は知らないからな」

俺は関係ないですよー、と言しながら幸也はパンにかぶりついていた。……まあ、俺だつて正直怖いけど。でも、流石に食べなきやもつとひどいだろ。

「じゃあ、買つてくれるわ」

そう言い残し、購買所に向かおうと教室の扉に手をかけようとしたその時、いきなり扉がガラガラと開いた。そこには思いがけない人が、というのとはちょっと違つ。

……ああ、やっぱり来ちゃつたか。

「こんなところまでじうしたの？」一之瀬さん

「悠くんと一緒に、昼食を食べようつと思つて。だめだつた？」

「だめなんて言わないでしようね。せつかく私が綾香をここまで連れてきたというのに」

首を傾げながら弁当を掲げる一之瀬さんに引き続き、俺を睨めつけながら言つ結衣。

「言つとくけど悠、綾香はあんたのことを気遣つていたんだからね

「一之瀬さんが俺を気遣う？ 何に？」

「……だつて悠くん、田立つの嫌いそつだし。もう私と付き合つてしまつていう噂流れちやつて、迷惑かなつて思つたから」

私のせいで「めんね、と俺に謝つてくる一之瀬さん。

「綾香、そんな気にすることないわよ。悠だつてやつなること重々承知で綾香と付き合つたんだろう」「

ね? どちらを見ながら聞いてくる。

「やつだつて、確かに俺は田立つことは嫌いだけどさ。結衣の言つとおり、じとになるのは付き合つ前からわかつていたことだし、一之瀬さんは気にすることないよ」

「……本当に?」

「本当だつて」

その言葉に安心したのか、彼女はほつと胸をなでおろす。

「よかつたー」

「大袈裟だなー、もつ」

よかつたよかつたと喜んで言つ一之瀬さんに、思わず笑いながら返してしまつ。

「笑い」とじやないよ。……だつて、本当に怖かつたんだよ。悠くん田立つこと嫌いだから、嫌われてしまわないか心配で」

そう拗ねた口調でいう。だけど、次第に言葉が弱弱しくなつていつて、その時のことを思い出したのか、一之瀬さんは泣きそうになつていた。

まだ昨日付き合つたばかりといつの、「こんなに俺のことを考えてくれていたなんて。そんなことを思つと、つい思わず頬が緩んでしまう。

「まあ、やつこいつ」と。綾香はずつとあんたのことを気にしていたんだから。ほら綾香もそんなことや泣かないの」

「泣いてないもん!」

「はいはい、わかったからわかったから。よしよしー」

「もう結衣、怒るよ!」

こつしてみると、まるで姉妹だな。

そんな二人の姿を見て、思わずそんなことを思つてしまつた。

第五話 疑問（前書き）

何故か、お気に入りが倍になつていた件。

第五話 疑問

「さて、そろそろ昼食にしましょうか、休み時間も限りがあるし。
……もう綾香、いつまでも拗ねてないで」飯食べよつ?」

「拗ねてないもん」

結衣の問いかけに、そっぽを向く一瀬さん。どうやらやつれ子供扱いされたことに根を持つているらしい。拗ねている一瀬さんもかわいいなと思つてしまつたが、結衣の昼飯という単語に、今日昼食の弁当がないことに気がつきふと時計を見る。昼休みに入つてもう既に十分近く経つている。

そういえばだれか言つてたつけな、購買のパンは人気だからすぐになくなるつて。

「だから、悪かつたつて。 ん、どうしたの悠、疲れ果てた顔をして」

「今日理沙ちゃんから弁当貰えなくて、昼飯ないんだつてさ」

先にパンを食べていた幸也がいつのまにか、こちらに来ていた。俺のかわりに幸也が代弁してくれたから特にいうこともなく、空腹に満ちたこの腹を押さえながら、まだ残っている可能性がある購買に足を運ぶ。

「あーそれでかー。わざわざこの廊下で会つたんだけど、理沙から弁当預かってるわよ」

立ち止まって後ろを見ると、結衣の右手に見慣れた弁当袋がかかげられていて、すぐさま俺の弁当だとわかる。

「理沙何か言つてた?」

「いや、悠のクラスに向かっている途中に理沙が居たから話しかけたら『これを兄さんに渡してください』って弁当を渡されてすぐにどこかにいったわよ」

そういうながら、弁当を受け取る。

そういえば、弁当を渡されていないだけなんだから、理沙のクラ

スに直接行つて貰つてくれれば良かつただけじゃないか。何を勘違いしていたんだろう、俺。

「さて、時間もそんなあるわけじゃないし、今日はここで食べましょうか」

本当は中庭で食べたかったんだけどね。と結衣は言いながら、俺の席の周りの机と椅子を借りることにしたみたいだ。結衣と一之瀬さんがそれぞれの弁当を取り出しながら、それに続くことに俺も取りだす。

「しつかし、あいかわらず理沙も毎日こんな弁当作るわね。私には到底真似できないわ」

俺の弁当を見ながら結衣はため息を吐いた。

おかげで連なつてるのは、卵焼きやアスパラのベーコン巻き、鳥の唐揚げに加え金平ゴボウ等だ。鳥の唐揚げに関しては、冷めていても肉が固くならず、ジューシーになつてゐるから大分手間がかつてゐるんだろうなと察することができる。

「確かに、あいつ多分毎日五時起きだぞ」

「うわー、私には無理。悠も理沙にまかせつきりじゃなくて何か手伝いなさいよ」

結衣が半ばジド眼になりながら、俺に言つてくる。

そりやあ、俺だってそれを何度も思つたかわからない。毎日大変だろうから理沙に手伝おうか？ と、聞いかけたこともあつたさ。

でもや

「兄さんが手伝うと逆に仕事が増えるって言われるんだよな

『あー、確かに』

何故か、結衣と幸也から賛同をいただいた……うれしくねえ。

「まあ、俺だつて理沙の負担を減らしてあげたいんだよなあ。あいつ、いつもどこかで無理するから」

理沙はいつもどこかで無理をする。そして、それを悟られないようく笑顔を繕う。本当に自分で出来ないもの以外は自分で解決しよう

とする。そのことで何回あいつがぶつ倒れるといひをみたことが。

すると、一之瀬さんはポツッと一言を呟く。

「きっと、悠くんはそのままいいんだよ。理沙ちゃんことってはそれが生きがいだと思うから。悠くんのお世話をするのが、自分のいる存在意義になつていてるんだと思つ」

付き合つたばかりなのに知つた口を叩いて「ごめんね」と、彼女は言つ。

「まあ、それもやうなんだけれどね。綾香もそんな他人行儀みたいにすぐ謝らない」

「だつて、なんか場違いみたいで。そういう話とかわからないし」

「うつむきながら一之瀬さんは答える。

その言葉にハッとなる。そつか、俺と結衣はいつものノリで喋つていただけれど、それじゃあ一之瀬さんがわからないよな。「ごめん、一之瀬さん。俺、そこまで気が回らなかつた」

「良いんだよ悠くん」

そういうつて一之瀬さんは微笑む。

その表情は、心なしか悲しそうにみえた。

思わず歯をかみ締める。

俺は、何をやつているんだろう。昨日突然に告白されて、彼女を好きになつて。今朝、一之瀬さんは俺と登校するために、家の前でずっと待つていてくれていた。この昼食のときだつて、俺のことを考えて、嫌われるのが怖くて来れなかつたと結衣が言つていた。

それなのに俺は、周りの眼と今朝の理沙を気にしていただけだ。何も考えていなかつた。迷惑じゃないと言つておいて、結局俺は彼女なにをしてあげれているんだろうか。

昨日、付き合つことであんなに喜んでいた彼女のことがふと思い浮かぶ。

「悠くんは、気にしなくて良いから」

そんな彼女を俺は、何をしてあげるんだろう。

一体、付き合いつつじぶんことなのだらうか。

第五話 疑問（後書き）

感想は作者の励みになります。
些細のことでもいいので感想を貰えたら幸いです。

これから連載に当たって

今回、執筆してきたの中にあたって、読み返してみると、違和感と構成の甘さを感じました。書きたいことがうまく書かれていないのでこのようになつたんだと思います。

ですから、誠に勝手ながら、連載を一旦中止して、もう一度から練つてから、再投稿してみようと思つていて、次投稿するときは、ある程度まとめて書いてから投稿してみよう思つています。

文章が短い面があり、区切りが不自然なのが原因かもしれません。まだ、このことは迷っています。そこでみなさんの意見が聴きたいです。

なお、意見がない場合は勝手ながら、連載を一旦停止して、再投稿することにします。

沢山のご意見を貰えると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8987w/>

学園のアイドルと少年

2011年10月6日03時12分発行